

協議会ニュース 97号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2004. 11



奥三河の四季

『ブナ倒木』

ブナ科ブナ属

10年ほど前にブナの大木が倒れた。樹齢が数百年の老木になると色々な植物が着生している。大きく開けた林床には陽が降り注ぎ次の世代の幼木が育ち始めている。

高さが 15~30mになる落葉高木

2001. 12. 2 撮影: 近藤 守 (西三河支部)

●特集

協議会研修会「愛知県の植生とその現状」

レポート: 小川 展弘

.....P2~3

「植生管理研修会」

レポート: 松原 秀臣

.....P4

レポート: 樋口 祐子

.....P5

・会員のページ 稲生 和久

.....P6

・会員のページ 降幡 光宏

.....P7

・観察会あれこれ 齋竹 善行

.....P8

・Web ページ紹介 吉田 彰

.....P9

・寄稿文 金森 正臣

.....P10

・事務局だよりP11

・編集部だより・行事予定 他P12

講座研修「愛知県の自然の状況－生き物を通して－」（第2回）

『愛知県の植生とその現状』聴講要旨

（講師：中西 正 当協議会会長）

報告：知多支部 小川展弘

研修場所：なごやボランティアセンター NPO センター 会議室

研修日時：9月23日（祝、木）

《プロローグ》

愛知県の気温と降水量は、年による違いが大きい。降水量分布では最大 2,100mm、最小 1,200mm の変動が、気温においては最大 17.3℃、最小 15.4℃の差がある。近年温暖化の傾向にあり、植生には少なからず影響を及ぼしている。植生群落の成立条件である気温と降水量について夫々変動分はあるが、気温 15~16℃、降水量 1,800mm の範囲内で愛知県の植生の特徴とその近況について述べたい。



写真 研修風景

《愛知県の群落分布》

- ・日本の森林帯を大まかに分類すると、沖縄は亜熱帯の多雨林（ビロウ等）、その北が暖温帯で常緑広葉樹林（照葉樹林）帯が分布する。本州の中北部と北海道東部を除く残りの地域が冷温帯で落葉広葉樹林帯が主体、北海道東部は常緑針葉樹林帯である。
- ・従って、本州中央部で、降水量もある愛知県は水平分布的に見ると北東部日本の樹林帯と接した照葉樹林帯でシイ類、カシ類、クスノキ、ツバキ、タブノキ等で構成されている。
- ・また、垂直分布模式的な群落で見ると奥三河、設楽山地は冷温帯の落葉広葉樹林のブナ、ミズナラ群落で、尾張丘陵、濃尾平野は暖温帯のシイ・タブ群落の照葉樹林帯で構成されている。

なお、標高約 700m の中間温暖帯域ではモミ、ツガ、シキミ等の常緑高木が分布する。暖温帯の段戸山・裏谷には、中間温帯のモミ、ツガ群落も混在している。

《特異な群落の存在》

- ・湿地植物群落で有名な葦毛湿原にはモウセンゴケ、サギソウ等の群落と、その周辺には、コナラ群落、スギ・ヒノキ植林が見られる。

- ・同じく豊橋市東部にある標高 358m の石巻山には、石灰岩地植物である常緑性のクモノスシダがある。
- ・渥美半島西部のハマナデシコ、ハマウツボ等は海浜植物群落の代表例である。これら湿地、海浜(塩生含む)植物は、その群落域が狭くかつ小分布のため植生図には載らない。この他、奥三河の一部にしか咲いていないエンシュウシャクナゲ等愛知県・静岡県の一部にしかない植物がある。

《里山の認識》

- ・県内の標高 300m 以下の二次植生分布データに基づき、豊橋、豊川、奥三河など代表的な里山群落の来歴を概説。
- ・過去の里山は、松林であり、それが松枯れでなくなってしまった。
- ・その出発点は、20 年サイクルの雑木林の循環図を描いた“教科書”だけではないことを強調。

《植生に関する課題》

- ・植生の増加と相俟って無管理状態で放置されている。
- ・植物の持ち込みやピクトのあり方などを例示、自然認識の再構築と効用を力説された。

《質疑応答と今後の取組み》

里山管理について、

- ・全体の生態系を考えた循環型の管理が望ましい。
- ・今ある地域毎に当てはまる、将来を見越した植生を考慮する必要あり。
- ・外来種などは、ゾーン (zone) 化する必要あり。
- ・自然観察指導員として参加者にどう説明するか。

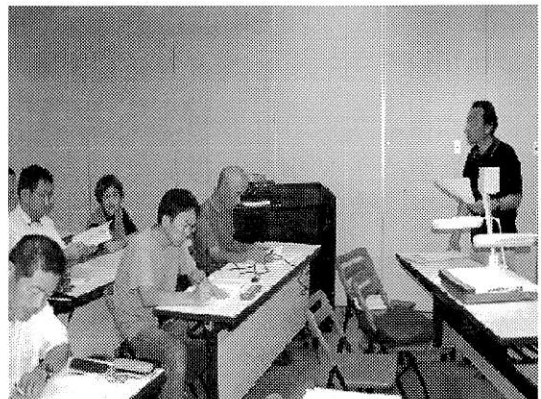


写真 熱心に説明する中西先生

等の意見が抽出され、別途“部会 (WG)”などを通じ見解を統一する必要ありとの認識で一致した (平成 17 年 1 月 30 日開催の里山研修時には具体事例紹介などをお願いする事が決定された)。

植生管理研修会報告

9月4、5日（土、日）に春日井市少年自然の家にて参加者34名で植生管理研修会が開催されました。あいにくの雨のため、講義が中心となりましたが知見を深めることが出来ました。

<1日目>

名古屋支部 松原 秀臣

午後から始まった研修会の最初は、岡山理科大学の波田先生の講義でした。

「植生調査の目的とアプローチ」というタイトルでしたが、先生は『湿原の植生』が専門とのこと。話はいきなり「里山の成立条件」云々で始まり、日本にしか成立しない里山は、“稲作+畑作+農用林”としての身近な山林があったことで、その存在を可能にしたこと。また果たして里山の復元は可能か等の話があった。更に里山で利用された樹木の種類や特性、シードバンク（休眠種子）をつくる樹種や遷移の進んだ湿原の復元・保全工事の経験から興味深い話があった。

その後、実地に「植生調査」をする目的で、全員会場近くの高台に登ったが、あいにくの荒天で予定の調査はできず、残念。高台に上る途中で遷移途中の湿地を見たが、「自然保護」の本来の目的とあり方について考えさせられた。

夕食後は千葉県立中央博物館の中村

先生の「里山の見方、考え方、接し方、そして使い方」というタイトルの講義があり、特に先生自身が地元で“里山の自然環境を復元させ、守る”実践的な指導とそのための基本的な理念を、展望をもって話されました。その話の中で、愛知県にはそれなりの規模（国・県立）の「自然史博物館」も「生態園」もなく、この地域の自然保護運動をリードする専門分野ごとの研究者が少ない（いてもきわめてマイナーな存在）という残念さを改めて感じた。万博を機会に、海上の森にそんな研究センターを作る運動が盛り上がってくれるとうれしいのですが。

いずれにしても愛知県の植生は「周伊勢湾要素」、「東海丘陵要素」と呼ばれる大変特徴のある植生が多くあります。これらを含めてこの地域の全体像を把握する規模の大きな調査計画の立案が望まれます。



岡山理科大学波多教授によるフィールドワーク

< 2日目 >

尾張支部 樋口 祐子

前日からの雨が止まず、一日中雨でした。予定では8時から植生管理プランニングの進め方の講義を受け、その後、昼まで各グループに分かれて実習を行い、午後から植生管理プランの発表とまとめということでした。私は少年自然の家及び築水の森の辺りを歩いているので、築水の森を中心とした植生管理に関心を持ち、植生管理プランニングとはどんなものなのか、また、植生管理はどのように行うのかなどいろいろ教えてもらいたいと思い、申し込んだのですが、雨で実習が中止となり、とても残念でした。

当日は予定を変更して、『地域の保全活動の課題』と『自然観察会の問題点』の2つについてワークショップの形でグループごとに話し合い、その結果をB紙にまとめ、午後からグループごとに発表しました。保全活動については不在地主が多く、土地所有者がはっきりしない、情報不足である、行政との

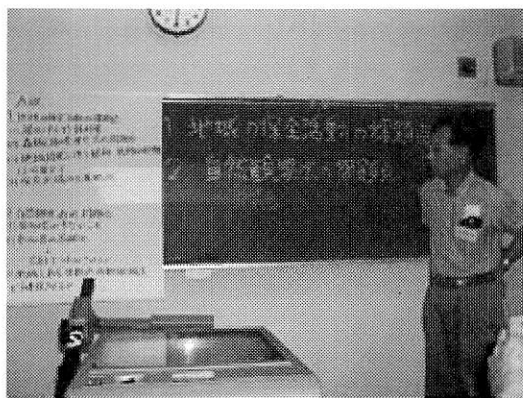
かわり、市民参加の組織作りのむずかしさなど活発な意見が出されました。自然観察会の方は年間プログラムをいかに作るか、様々な参加者を満足させるプログラムをいかに作るか、若者をどう参加させるか、地域の複数の活動組織をどのように連携させるかなどの問題点が挙げられました。

参加者の中には森作りや湿地の保全活動、水源の森トラスト、子どもエコクラブのサポーターなど多彩な活動に取り組んでいる方が多く、その熱心な活動に感心させられました。

- 観察会の進め方として、中村先生から
- ①年間計画をできるだけ早く作る。
 - ②テーマを設定する。(たとえば子どものための観察会、親子のための観察会など)
 - ③子どもの発見を聞き、感動を共にする。

の3点について助言がありました。

自己紹介カードを見ると、参加の目的として植生管理について学びたい、しっかりした知識を身に付けたいという意見が多くあったように思いました。私としては、このような演題による話し合いではなく、なかなかこのような機会は無いので、お二人の先生方の講義を集中講義でみっちり聞きたいと思いました。



グループ討議後の参加者による発表

壱町田湿地の植生管理

知多支部 稲生 和久

壱町田湿地は、知多半島の武豊町北部にある丘陵地帯の中の小さな湿地です。湿地の広さは周囲を囲む林を含めてもおよそ 1.1ha ほどしかなく、湿地の面積だけとなると 10a はありません。しかし、この湿地は愛知県のレッドデータブックで絶滅危惧種 I A 類に分類されているシロバナナガバノイシモチソウや同 I B 類のヒメミミカキグサを始めとする多くの貴重な植物が生育し、昆虫ではハッチョウトンボや準絶滅危惧種のヒメタイコウチなどが確認されている群落であることから、昭和 59 年に愛知県の天然記念物に指定されています。これらの貴重な生物からなる群落を守るため、武豊町歴史民俗史料館が中心となり、壱町田湿地を守る会と総合的な学習の時間を活用して地元の小中学生が保全活動を行っています。壱町田湿地の保全活動は湿地内の除草作業と湿地の周囲を囲む林が湿地に影響を落とし過ぎないようにするための剪定・間伐などがあります。

除草作業については武豊町周辺には本来どのような植生をした湿地があったのかを考えた上で、どの程度の頻度と強度で行えば良いのかについて守る会の中でも確かな答えが出せずに、様子を見ながら少しずつ行っています。具体的には全体を春と秋に除草するのですが、大部分は自然に茂ってきたイネ科などの草がいくらか残る程度で除草する中に、部分的にすべての草を取り去る部分を作っています。これには、シロバナナガバノイシモチソウやミミカキグサ類は湿地の中で

もイネ科植物などの無い泥の上でよく生育するものの、湿地のすべての草を取ってしまうことは湿地の本来の植生とは異なってしまう、湿地の保全の観点とは、ずれてしまうという理由があります。

また湿地の周囲を囲む林は昔、仏壇へ供えるヒサカキを採る林であったらしく、ヒサカキが多く生えています。しかし、近年、ヒサカキが徒長し、湿地への日当たりが悪くなるほどになっていること、そして湿地は貧栄養な土地で成立することから、間伐や剪定についても近く予定しています。非常に小さな面積の群落なので切り過ぎず、かつ湿地の富栄養化が進まないように慎重にしています。

各地で湿地や里山の管理は行われていますが、壱町田湿地では管理をしていく上での目標とするイメージを作り上げていくことの難しさを守る会のメンバーは最近、特に実感しています。植生は一度変えてしまうと、それが回復するには非常に長い時間がかかることから、将来に残すべき価値のある植生とはどのようなものなのか、そのために何をすれば良いのかを考えながら、守る会の活動は行われています。



今年 9 月 5 日の公開日の様子

「見る・触れる・感じる」の大府市自然体験

学習施設「ニツ池セレトナ」にお越しください

知多支部 降幡 光宏

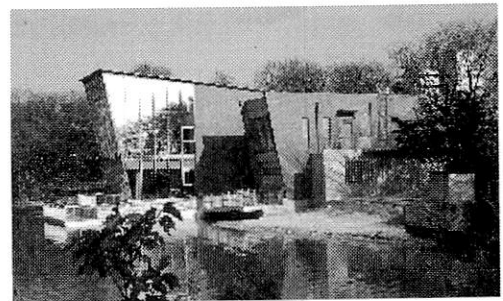
4月から上記の施設に臨時職員として勤務しています。今までの仕事とはがらりと変わり、ライフワークのみになったような職場です。総工費4億円の内、国から2億円の資金で作られたこの職場には、本来、正規職員が勤務していて、その指示により働きたいところです。しかし、臨時職員4人で、あたふた施設運営をしています。そんな中、施設の名称の由来に負けないような色々な行事を試行錯誤しながら計画しているところです。自然体験学習関係に人的つながりが無いので、僅かなお礼で大府・知多自然観察会の皆さんに、主な行事のお手伝いをお願いしています。

施設があるニツ池公園の面積のほとんどは、池で森の部分が少なく、その樹冠の半分以上はニセアカシア、ソメイヨシノなどの植栽樹が占めています。園内は定期的に池の縁から林縁まできれいに草を刈り取るので、帰化植物が優占する植生となっています。広い面積を占める池には外来種のミシシippアカミミガメ、ウシガエル、オオクチバス、ブルーギル、コイがたくさん生息しています。二つある池の下池に、一周する遊歩道があります。遊歩道の一部は親水デッキといって池に張り出した遊歩道が作られ、さらに池の中心に向かって、浮き桟橋が設けられています。そして池の中心には噴水が夜まで水を噴き上げ夜間照明がつけられます。その関係で水鳥はほとんど寄り付きません。「ニツ池セレトナ」の施設は池に向かって3方が広いガラス面になっていて、噴水がある池への眺めは最高です。反面、この広いガラス面に野鳥の衝突死が時々発生します。今までにスズメ、カワセミ、センダイムシクイ、ジュウイチ、カッコウ、キジバト、キビタキが犠牲になりました。

自然体験の中にキャンプ、スカウト、

登山、ハイキング、冒険体験、スキー、スノーボード、サイクリング、マウンテンバイク、乗馬、カヌー、カヤック、ダイビング、釣り、ボート、ヨット、グライダー、スカイダイビング、ハンググライダーなど加える解釈もあるみたいです。今までの経験からするとアウトドアスポーツは、自然の中で、生き物を意識した各種の自然体験学習をするのとは、別のような気がします。熱心にスポーツをすればするほど自然を構成している生き物に目が行かなくなると思います。

「ニツ池セレトナ」で行う行事にレクリエーションの要望も現実にあります。少なくともここで行う行事は生き物とかかわりを持ち、自然環境を考える自然体験事業をするつもりです。



施設は都市公園内で、色々な制約があります。そんな中でどんな活動をしていくか思案をしています。公園の中で広い面積を占める池には水生植物が少なく、外来動物が圧倒し住んでいます。これを逆転させるために水辺に水生植物を植栽し、水質の改善を図ること。園内にはびこっているニセアカシアを押さえて知多地方に自生する樹木を植栽していただくように働きかけたいと思います。

上池は更地の中にある池で毎年、カモの渡りがやってきます。この池を市民参加で時間を掛けて、この地方にふさわしい自然にしたいと思っています。しかし、都市公園内の未整備地であるので国庫対象事業にされる可能性があります。

以上、現状と私見を述べました。

「ニツ池セレトナ」の活動案内は

<http://www.medias.ne.jp/~seletona/>



自然観察のフィールドを良好な状態に保つためには管理が必要ですが、きちんと行おうとすると人手がかかりなかなかたいへんです。そこで、限られたメンバーだけでなく、多くの人が管理に参加できるような仕掛けが望まれます。

私たちの観察フィールドは、1996年に開設された「岩倉市自然生態園」です。水田地帯に位置し、鎮守の森を囲み、池と草原を配置した面積約7000 m²(鎮守の森を含めた面積)のビオトープ公園です。

ビオトープだから手を加えずに、放置しておけばいいという考え方もあるかと思いますが、子供たちが魚や昆虫などの小動物とふれあう場として整備された公園という場所柄、ある程度の管理は必要です。園内の草原部分は、年2回、市が付近の老人会に委託して草刈を実施していますが、それ以外、例えば池の中などはその業務の対象外となっています。

ここは「たんぼの国のとんぼの郷」と名づけられ、池は通称「トンボ池」と呼ばれているように、トンボが生息できる環境をめざしています。

開設以来、生態園に生息する生物のモニタリングを実施していますが、開設後4年目くらいから池から発生するトンボの種類も量も減少してきました。人工的なビオトープではどこでも見られる現象のようです。代わりにアメリカザリガニ(以下「ザリガニ」と表示)など特定の種が増えています。トンボが減ったのは池の環境が変化したことが大きく効いているのかもしれませんが、ザリガニによるヤゴの捕食も原因の一つと考えられます。

そこで、池のザリガニが増えすぎないように管理することが求められます。ボランティア

を募ってザリガニを捕獲しようとするのたいへんですが、来園者にザリガニ釣りを楽しんでもらい、釣り上げたザリガニを池に戻さないことで、数のコントロールが可能です。そのため、中学生以上は原則として小動物の採取禁止としている生態園ですが、ザリガニ釣りを認め、ザリガニ釣り大会を開催するなどして来園者に釣り方を教えたところ、今ではザリガニ釣りで有名になり、春先から晩秋まで多くの親子連れが訪れるようになりました。こうして釣り上げられるザリガニは、多い日には数百匹になりますが、それでも天敵がほとんどいない池ではザリガニはそれほど減少していません。

また、池に生えた水草の管理も重要です。池には最初にヒメガマ、マコモ、カンガレイを植栽しましたが、それ以外に地元の人がスイレン、キショウブ、カキツバタなどを植えました。これらが年とともに生育範囲を広げて水面のかなりの面積を占めるようになってきました。そうすると、トンボがたくさん生息できる環境としてふさわしくなくなるため、水草の刈り取りも必要になってきます。

そこで毎年1回秋に、池の水を抜いて水草の刈取りを行い、あわせて農業用水を通じて入ってくるコイやナマズなど大型の魚やカメなどを五条川に移しています。これも市民に呼びかけて実施していますが、魚のつかみどりには加わっても水草の除去に参加するまでには至っていません。レンコンに似たスイレンの根を折らずに長く掘り出すコンテストなどを開いて、参加を促すようなことを考える必要があります。



西三河自然観察会のホームページ開設

西三河支部 吉田彰

西三河自然観察会

〔愛知県自然観察会専門協議会(西三河支部)〕

西三河自然観察会とは

愛知県のほぼ中央を流れる西三河川。この源流河川圏を中心とした地域が「西三河」と呼ばれています。西三河は、豊田市など自動車工業の盛んな都市をいくつも抱え、自然・景観が豊かです。しかも、豊田から豊橋まで連続した豊かな自然環境が広がる地域でもあります。

私たち「西三河自然観察会」は、ふだんあまり聞かれないこと、身の回りには自然に溢れ、観察することにより、この豊かな西三河の自然について、多くの人々に関心を持っていただくことを目的としています。

ぜひ私たちの「観察会」に参加し、西三河の自然に触れてください。

自然観察会のご案内

1. 西三河支部定例観察会

西三河地域の1ヶ所の観察地で、西三河を巡りておこなっている観察会です。年1回1ヶ所、年1回4回、1ヶ所を自然観察会として開催します。

期 間	場 所	主 題	集合時間・場所
第1回 平成18年 4月10日(日)	宝島ものわりの森公園	宝島ものわりの森公園	朝7時、朝7時
第2回 平成18年 7月10日(日)	水生昆虫観察地	水生昆虫観察地	朝7時、朝7時
第3回 平成18年 10月10日(日)	色づいた木の森と木のキノコ	色づいた木の森と木のキノコ	朝7時、朝7時
第4回 平成18年 12月10日(日)	冬の山と雪の森	冬の山と雪の森	朝7時、朝7時

2. 西三河支部主催観察会

期 間	場 所	主 題	集合時間・場所
第1回 平成18年 4月10日(日)	小の森自然観察地	小の森自然観察地	朝7時、朝7時
第2回 平成18年 7月10日(日)	小の森	小の森	朝7時、朝7時
第3回 平成18年 10月10日(日)	愛知こどもの森	愛知こどもの森	朝7時、朝7時

3. 地域定例観察会

期 間	場 所	主 題	集合時間・場所
毎月第1日曜日	宝島ものわりの森公園	宝島ものわりの森公園	朝7時、朝7時
毎月第2日曜日	水生昆虫観察地	水生昆虫観察地	朝7時、朝7時
毎月第3日曜日	色づいた木の森と木のキノコ	色づいた木の森と木のキノコ	朝7時、朝7時
毎月第4日曜日	冬の山と雪の森	冬の山と雪の森	朝7時、朝7時
平成18年 4月10日(日)	小の森自然観察地	小の森自然観察地	朝7時、朝7時
平成18年 7月10日(日)	小の森	小の森	朝7時、朝7時
平成18年 10月10日(日)	愛知こどもの森	愛知こどもの森	朝7時、朝7時
平成18年 12月10日(日)	冬の山と雪の森	冬の山と雪の森	朝7時、朝7時

「西三河の自然」観察ポイント

期 間	場 所	主 題	集合時間・場所
毎月第1日曜日	宝島ものわりの森公園	宝島ものわりの森公園	朝7時、朝7時
毎月第2日曜日	水生昆虫観察地	水生昆虫観察地	朝7時、朝7時
毎月第3日曜日	色づいた木の森と木のキノコ	色づいた木の森と木のキノコ	朝7時、朝7時
毎月第4日曜日	冬の山と雪の森	冬の山と雪の森	朝7時、朝7時
平成18年 4月10日(日)	小の森自然観察地	小の森自然観察地	朝7時、朝7時
平成18年 7月10日(日)	小の森	小の森	朝7時、朝7時
平成18年 10月10日(日)	愛知こどもの森	愛知こどもの森	朝7時、朝7時
平成18年 12月10日(日)	冬の山と雪の森	冬の山と雪の森	朝7時、朝7時

「西三河自然観察会20年のあゆみ」

お問い合わせ

お問い合わせ先：西三河支部 吉田彰
Eメール: nishimikawa-shizen@mita.2y.net

このたび西三河自然観察会のホームページを開設しました。

ホームページアドレスは

<http://www.mita.2y.net/nature/nishimikawa/index.html> です。

現在は自然観察会の日程案内などが中心で、まだまだ不十分な内容ですが、順次、西三河自然観察会の活動報告や西三河の自然に関する資料などを掲載していく予定です。

また、西三河自然観察会の専用メール(nishimikawa-shizen@mita.2y.net)も開設しました。

リンク集などの掲載も予定していますので、相互リンクをいただける方、あるいはご意見や資料を提供いただける方は nishimikawa-shizen@mita.2y.net までご連絡ください。

ご協力よろしくお願ひします。

カンボジアの温泉

協議会顧問 金森 正臣

カンボジアには温泉はないものと思っていましたが、西の方のキリロム山塊の東端に温泉が出ていました。水温は65.3℃、立派な温泉です。暑いところの人達は、温泉には関心が薄いらしく、入る様にはなっていませんでした。山の端に湧き出していると言うので、私も同僚の村山さんも小川に湧き出している温泉を想像していたのですが、なんと平坦地の湿原の真ん中に出ている様な温泉でした。手を入れられない温度です。草原は結構70センチぐらいの草丈があり、奥の方は分かりませんが、熱い温泉の縁まで茂っています。草の根元の温度を測ると45℃程度はあり、これで良く生活できると思いました。この土地は、環境省がエコツーリズムを考えていたようですが、現在は金持ちの中国人の物になってしまっているとのことでした。因みに温泉の回りには妙に赤いトンボが、縄張り飛行をしたり、草の茎の高いところに止まったりしていましたが、まさか温泉に卵を生み付けているのではないでしょうと思ひながら、なぜ温泉の上だけという疑問は解けませんでした。この温泉では温泉卵ができるそうです。カンボジア人も温泉卵を食べるのかと思ったら、どうやら茹でることが出来ると言う意味だったようです。トンボが卵を産んでも温泉卵になるのかナーと、極楽トンボの様なことを考えていました。

昼食の前に、村山さんが3-4軒有る売店の中から呼ぶものですから行って見たら、何か黒々とした液体がプラスチックコップに注がれていました。一口飲んで見てはいかががかと進められて恐る恐る飲んで見ました。あまり強い臭いもなく焼酎様の物に何か漬けてあると言うことでした。店の奥に（と

言っても4-5歩も歩けば裏に出てしまいそうな店ですが）、プラスチック製の100リットルぐらいのバケツに造られていて、お客にそこから汲み出して飲ませていました。中を覗くと村山さんが棒でかき回しながら、底からい



へビ・サル・カメのお酒←

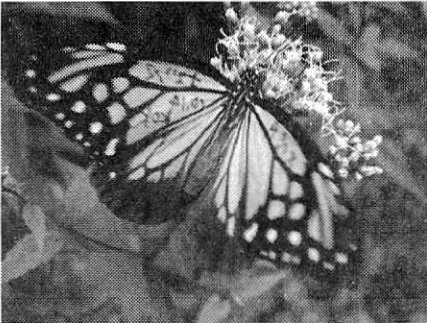
ろいろ持ち上げてきます。サルの薫製状態の物、カメの丸ごと、へビなどはその姿から分かりましたが、他にも何か入っているようです。サルもカメも1個体しか入っていないようでした。

サルはスロー・ロリスの仲間（英名: Slow Loris / 学名: Nycticebus coucang）、昔から薬として使われていたようです。一昨年の正月にシェムリアップの奥の、プノン・クーレンの山の中のお寺に行った時も、沿道で幾つか売っていました。開いて薫製状に干してある一つを標本のために買ったが、生きた物もどうかと言って進められたので、森林地帯では、普通に売られているようです。他にもコンポンチャムの市場で見かけたことがあり、伝統薬として需要が結構あるようです。実際の使い方が分かったのは初めてです。煮出して使うのかと思っていましたが、アルコールで抽出するのが普通なのかも知れません。カンボジアには、ピグミー・ロリス（英名: Pygmy Loris / 学名: Nycticebus Pygmaeus）もいるようですが、あまり見かけたことはない様に思います。いずれも保護獣になっています。村山さんは、1リットル入っているこの抽出液を買いましたが、5ドルとカンボジアとしては結構なお値段でした。ラベルには、男性の夜の薬だという話も書いてありましたが、何にでも効くと言うことでした。この薬が効いたのか、昼寝はぐっすりでした。

■ 名古屋支部

アサギマダラ・マーキング調査

～ テレビ愛知 にて報道～



◆フジバカマ吸蜜中のアサギマダラ

この秋、名古屋支部が取り組んだアサギマダラ・プロジェクトが TV 愛知の取材を受け、10 月 14 日（木）午後 5:25 より番組「映像アイ」にて報道されました。

撮影は 10 月 2 日（土）東山植物園内でのマーキング調査の日、当日は 7 頭をマーキングしました。アサギマダラの飛翔は天気の良い日に改めて撮影されました。アサギマダラ・プロジェクトを通して私たち名古屋自然観察会や自然観察指導員の活動を名古屋市内及び愛知県内の多数の人に、知ってもらう機会になりました。

10 月 20 日現在名古屋市内でマーキングした個体は、そのまま東部丘陵を知多半島あるいは三重県方面に南下するかと推定しましたが、東方向で捕獲されました。1 頭は幡豆郡幡豆町三ヶ根山で、いま 1 頭は県内田原市衣笠林道にてそれぞれ再捕獲。田原市へ飛来した固体は、観察会参加者がマークしたものの。「初めてのマーキング体験でこんなに早く再捕獲の情報が入るなんて夢のよう・・・」とご本人は大喜びの様子。その会の代表も「やったね!」と我が事のようにメールの文字が弾んでいました。

この先、鹿児島県の奄美大島・喜界島、さらには台湾などからも「ナゴヤ」マーク再捕獲! のニュースが飛び込んでくるかも知れません。

アサギマダラの飛行ルートを探る調査であると同時に、夢とロマンのある調査となりそうです。

（報告：名古屋支部

アサギマダラ・プロジェクト担当：近藤）

■ 名簿について

名簿の発送を秋に予定をしていましたが、来年 2005 年 1 月号に発送予定になりました。3 月の規約改正に伴う会費に関わる件が十分に周知されず、会費納入期限が遅れたことが原因です。今しばらくお待ちください。

■ 連絡先などの変更は早めに!

会員のみなさんへ

転居・婚姻などによる住所・名前などの変更は、速やかに事務局まで（最終ページ参照）連絡ください。

（以上、事務局：近藤）



■ 募集! 原稿・写真・イラスト

協議会ニュースでは会員のみなさんの参加をお待ちしております。

・原稿、イラスト、写真等・・・

「会員のページ」の原稿

「個人の WEB ページ紹介」の原稿

「観察会の報告」の原稿・写真

「観察会のネタ披露」の原稿

「表紙」の写真・イラスト

今年の表紙は、西三河の近藤守さんの写真をコメントと一緒に掲載していますが、みなさんも写真やイラストなどで参加してみませんか。年間でも、単発でも構いませんので、一度ご連絡ください。

その他様々な情報をお寄せください。お待ちしております。

（連絡先：最終ページ編集部 苅川まで）

◆投稿原稿・写真その他作品の掲載につきましては、編集部に一任をお願いいたします。（編集部）

研修会予定

講座研修「愛知県の自然の状況－生き物を通して－」

協議会主催

研修	日時	集合場所
「動物の暮らしと愛知県の自然」	11/23(祝) 14:00～16:30	場所 名古屋市教育館 第7研修室(2F)
「森づくりを通した実践活動報告&意見交換会」	1/30(日) 14:00～16:30	未定(詳細次回以降連絡)

申し込み方法 支部でとりまとめ大谷まで申し込む
 連絡、問合先 kokokei@nifty.com 0572-23-6907

協議会主催 講座研修

(協議会 研修部 大谷 PR 担当)

「愛知県の自然の状況－生き物を通して－」
 第三回

- 1 日時：11月23日(火 祝)
午後2時～4時半
 - 2 場所：名古屋市教育館第7研修室(2F)
(地下鉄栄3番下車 錦通りのすぐ北)
 - 3 内容：「動物の暮らしと愛知県の自然」
動物(ほ乳類・両生類・鳥類)から見た愛知県の自然の状況と近年の生物保護の課題
 - 4 講師：大竹 勝氏(当協議会前会長)
 - 5 申し込み方法・問い合わせ先
 - (1) 申し込み方法：支部でとりまとめ、又は大谷まで申し込む。
 - (2) 申し込み・問い合わせ先
e-mail kokokei@nifty.com
tel 0572-23-6907
- 多数の参加をお待ちしております。

発表者募集

協議会主催 研修会

「森づくりを通した実践活動報告&意見交換会」

日時：平成17年1月30日(日)
午後2時～4時半

場所：未定

募集内容

- ・グループ名、人数、活動内容、課題などを
- ・当日10分程度報告
- ・書面発表は

A4 1枚程度にまとめる。

発表者応募：12月25日 締め切り

原稿締め切り：1月15日

申し込み 研修部 大谷

e-mail kokokei@nifty.com

訂正のお願い

96号表紙 カワチブシの茎の高さの単位：
(誤) m. → (正) cm.

裏表紙 最後の行：95号→96号

編集後記

2004年の「協議会ニュース」は、当97号まで年6回を無事に編集・発行することができました。会員のみなさんに原稿執筆・写真提供いただきましたおかげ、感謝いたします。記念すべき100号も目前に迫っています。記念特集を検討しています。特集号の企画提案・あるいはエピソードなどの投稿をお願いします。みなさん、お待ちしておりますよ～。 (近藤記巳子)

編集スタッフ

稲生 和久、岩沙 雅代、近藤 記巳子、
 齋竹 善行、古川 俊江、苅川 真弓、
 松尾 初、横井 邦子、吉田 裕孝

◎みなさまのご意見・ご感想など原稿をお寄せください。

尚、原稿は内容を変えない程度に加筆・修正することがあります。あらかじめご了承ください。

「協議会ニュース」に関する宛先(編集部)
 〒445-0863 西尾市葵町4-4 苅川 真弓

愛知県自然観察指導員連絡協議会 事務局

〒457-0006 愛知県名古屋市南区鳥栖2-6-17 桜本町 CH101

近藤 記巳子 Tel/Fax 052-822-7460